

『振り向くと』

牧師 島田 勝彦

清水ヶ丘教会創立六三周年記念

ヨハネの黙示録第1章 12～16節

12節「わたしは、語りかける声の主を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見え…」

黙示録は迫害の時代に記された信仰書です。たとえ目にし、体験することが困難と苦しみに満ちていても、主なる神の約束と勝利を指し示しつつ、忍耐と希望をもって堅く信仰にたち続けるように励まし勧めています。わたしたちと共におられる方が始めであり終わりだからです。永遠に唯一変わることなく、信じる者を勝利に導いてくださる方がおられるからです。過去も現在も、未来においても、たとえ世の終わりが来てもそこに変わらずいてくださる方を信じ抜く確かさがこの書にあふれています。

10節に「ある主の日のこと」とあるのは、言うまでもなく主の復活を記念する日、週の初めの日のことです。

流刑によってヨハネはパトモスという島におりました。復活の勝利を記念する日に主の幻を見たことは、励ましであったことでしょう。当然それは苦難の中に、またいづくにあっても変わることのない、主に礼拝を捧げる日、その礼拝の中で示された出来事であったのです。

「後ろの方で・・・」

なるほど、神のみ声は後ろから聞こえてくるのです。あらかじめ、前から聞こえてくるようではありますが、多くは、神のみ声をわたしたちは後ろから聞いているのではないのでしょうか。「後知るべし」とあります。後でわかるのです。

わたしは、語りかける声の主を見ようとして振り向いた。振り向くと、「七つの金の燭台」が見え…。

20節によれば「金の燭台」とは、七つの教会だと。

「七」は完全数です。でも、この後挙げられているそれぞれの教会は必ずしも完全ではありません。欠けがあります。にもかかわらず主イエス・キリストがご自身の体として、「聖なる神の教会」(Iコリント12)

として区別された群として、完全なのです。

「燭台」は燭台でも、神のともしびを掲げる聖なる燭台、「金」とはそのような意味です。何ものによっても汚されることなく、腐食せず、キリストにあって「聖」とされた群の中に主はご自身を顕しておられるのです。

ですから、教会がどのような欠けを持ち、躓くことがあったとしても、主が「人の子」メシア、キリスト、救い主としてそのただ中においてくださる限り、教会は教会として立ち得るのです。

清水ヶ丘教会が本町にある旧生糸検査所の一室で「横浜ミッション教会」として誕生してから満六三年を迎えました。まことに「振り向くと」そこに主イエス・キリストがいてくださいました。この六三年間を通して、主イエス・キリストはどのような方であるか知ることができます。教会の歩みをとおしてもわたしたちの主、イエス・キリストを知ることができます。

このキリストの存在が、そのまま教会に委ねられている姿、新しいエルサレム、神の都を目標とし、未だ終末の時の中におかれている教会の機能、働き、役割、権威でもあるのです。

それは黙示、未だ封印された状態で表現されています。信仰を持ってしか理解し解き明かすことのできない内容です。ヨハネはその言葉に表しきれない神のご計画を幻の内に見、そして聞かされました。それを示されたのは主イエス・キリストでした。振り向けば、過ぎし日々教会の主として共にあり、すべてを見抜いておられたキリストがこれを見せてくださったのです。教会はこの主と共にあり、この主に導かれて、新しい天と地に備えて歩み続けるのです。

佐藤昌介は札幌バンドの中核的人物で、農業経済学者で札幌農学校教授・校長を経て北海道帝国大学初代総長に就任し、近代日本の黎明期の教育界に大きな功績を残された方です。1856年南部藩士の佐藤昌蔵の長男として花巻に生まれ、幼名は謙太郎と称しています。父昌蔵は後に代議士として活躍し、キリスト者であったようです。

1876年（明治9年）7月5日、東京神田一ツ橋通りの東京英語学校に三人のアメリカ人教師が教室のドアを開けるなり、威厳のある人が主に話しますが、生徒たちは殆ど聞き取れない中で、佐藤昌介と大島正健はよく理解できたのです。その趣旨は「北海道開拓のため高等農業教育を施す札幌農学校の開校に伴いアメリカから来た者である。この学校は四年間、月15円の官費が支給され勉強できる。卒業後は北海道開拓に尽くすことになるが、近々試験をするが応募してもらいたい。」との熱烈な勧誘演説に居合わせた多くの青年の心は揺れ動かされたのです。

試験は芝御成門の開拓使支所で英語と人物考査が行われ、首尾よく合格したのは前記2名を含め11名でした。先の熱烈な勧誘演説と試験で真中にどっしり構えて質問したのがW・Sクラーク、愛弟子の背の高いペンハロー（専門は自然科学）、ずんぐりしていたホイラー（専門は数学）です。

月々15円を支給される官費生となった佐藤昌介たちですが、統計的数字によりますと明治6年と平成20年の物価指数は8300倍ですから当時の15円は現在のおよそ12万5千円になります。ですから15円は学生としては大変高額であり、優遇されていたのです。

そのためにこれまでの弊衣破帽をかなぐり捨てて配られた制服に身を固め、勇躍開拓使御用船の玄武丸で北海道に赴くのです。

当時の札幌は人口2千6百人程の一寒村に過ぎず、その中で唯一の近代的な建物は札幌農学校で敷地は一辺が二百メートル余で、二階建て洋館の講堂・寄宿舎で僅か24人の学生が勉強するには贅沢な施設であったのです。これを見ても明治政府の期待の大きさ

がわかります。その為か、学力が一定以上満たさねば直ぐに退学を命じられ4年後の卒業したのは札幌学校より入学の13人と合わせた24人中、13人しか残されなかったようです。

佐藤昌介はこのような厳しい学生生活でも年長者としても人格的な面からも尊敬され中心的な働きをし、クラーク博士からも特に信頼されていたのです。博士は佐藤昌介に「学生たちへの親愛の情は遠く離れても途絶えることはない。」との最初の書簡を送っていることでもわかります。この後五通も送っていますが、中でも「キリスト教徒としての人格を信頼し貴君が、学業においても優秀であったことは私にとり誠に喜ばしいことです。このことは貴君の同僚や当局者の貴君に対する信頼を大いに増すことと思います」と将来を期待し札幌農学校を背負って立つのに違いないと期待していたのです。

以下次号